数えずの井戸

京極夏彦
Natsuhiko Kyogoku

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

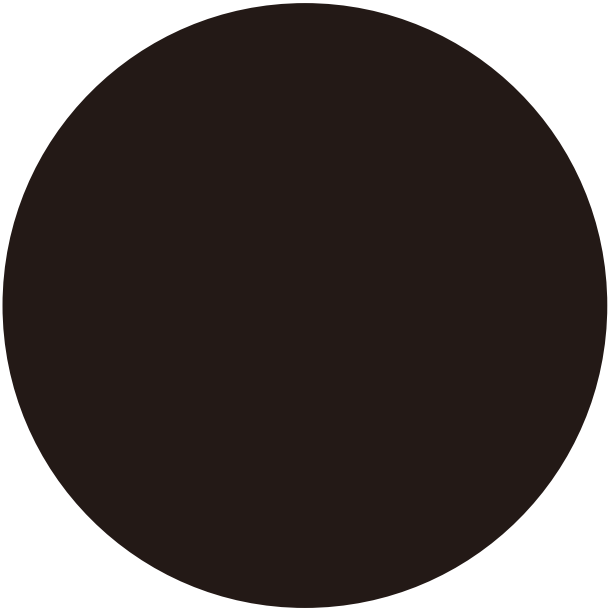
●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。
●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

◉ 目 録 ◉

序　七
昔数え　一九
数えずの娘　五三
誉数え　八七
数えずの刀　一二一
杵数え　一五三
数えずの衣　一八七
朝数え　二一九
数えずの縁　二五三
恥数え　二八七
数えずの傷　三二一
罪数え　三五三
数えずの宝　三八五
情数え　四一七
数えずの罅　四五七
痕数え　四九七
数えずの闇　五三九
悔数え　五七九
数えずの針　六一七
虫数え　六五九
数えずの空　六九三
皿数え　七二五
数えずの井戸　七二九
解説　七七四

数えずの井戸

序



番町青山家屋敷跡通称皿屋敷に怪事が起きるという評判が巷を賑わし始めたのは、青山家当主青山播磨が惨死し、青山家が廃絶になった直後、秋風が肌に沁み入るようになった頃のことであった。

その怪しき噂は、語る者語られる場所に依ってまちまちで、一向に摑み処なく、またそれぞれが荒唐無稽なものでもあったので、事実として受け取る者こそ殆ど居なかったのだが、彼の屋敷は元より悪しき因縁が語り継がれる曰く付きの土地でもあり、また館自体住む者もなく荒れ始めていたことも手伝ってか、彼誰刻を過ぎてより、番町のその一画に寄り付く者の姿は絶えた。

夜な夜な。

井戸より亡魂出でて。

数を数える——。

それは、そうした噂であった。

日暮れより訪れる者、近寄る者とて居らぬというに、丑三に涌き出ずる冤鬼の幽けき声を誰が聞くのか、その暝き姿を誰が見るというのか。

それでも。

その幽霊はうら若き見目麗しき腰元であるとされた。その女は、漆黒の井戸の孔より浮かび出で、哀切なる声音で、

一枚。
二枚。
三枚。
四枚。
五枚。
六枚。
七枚。
八枚。
九枚。

と――手にした皿を数えると謂う。

数は九で止まる。勘定しているのはどうやら十枚揃の皿であるらしいから、決して数え切ることはない。数えられぬ欠落が悔恨の蒼き焔となり燃え上がって女中の身を焼く。

焼き尽くす。

あな悔しあな哀し、怨めし恨めし一枚足りぬ、欠けておると、女は嘆き身悶え、陰火に焦がされて消ゆるのである。
誰が見た、誰が聞いたということはない。
多分誰も見ておらず、誰も聞いていない。
それなのにそこだけは決まったように同じであった。
誰が語るどんな話であろうとも、何故かそこだけは一緒なのだった。
だが――。
何故その腰元は、毎夜毎夜黄泉路から舞い戻り無間地獄の様を見せるというのか。
その理由の方は、語り手に依って変わった。
或る者はこう言った。
当主青山播磨様、腰元の菊なる娘の類い稀なる美しさにいたく執心致し、その惚け様に激しく嫉妬した奥方様が、菊の盛りし飯に針が混じりし由、主上を害し奉らんとする企みあらんと嘘の奏上、虚言を信じた青山播磨、可愛さ余って憎さ百倍、自らの手で菊を手討ちに致し、井戸に投げ込んだのであると――。
濡れ衣を着せられた菊の遺恨が毎夜井戸から涌き出でるというのである。
否――。
それは違うと言う者もあった。
それでは皿を数える理由が解らぬ。それ以前に青山播磨に妻は居ない――というのである。

或る者はこう言った。

青山家奉公人菊は腰元ならず下女である。身分卑しきのみならず、菊は生来の虚け者、粗相失敗跡を絶たぬ不作法者で、割れば死罪と取り決めの、先祖伝来の家宝の皿を一枚割って、故に手討ちにされたのであると――。

高が皿一枚と引き換えに命を取られたその遺恨こそが、夜な夜な今生に迷い出ずる理由也というのである。

それも違うと言う者もある。

割れば死罪が決まりごとであるならば、割った菊にこそ非があろう。それを憾むは逆恨み。何よりも、菊が下女風情の身であるならば、曲り形にも家宝とされる大事の品に、手など触れさせる訳もない――というのである。

或る者はこうも言う。

これは復讐であるのだと。

ひと昔前、火付盗賊改役長官であった先代青山鉄山の手で処刑された稀代の盗っ人こそが菊の父であったというのである。

その父の遺恨を晴らすため、菊は青山家に入って仇を為し、家宝をば割り、死して後も祟っておるのだと――。

これもまた逆恨みではあるのだが、凶賊無頼がご政道に刃向かうは世の習い。親の遺恨を子が子に向けたる悲劇、親子二代に亙る因縁也というのである。

それも違うと或る者は言う。
親の遺恨を晴らすため御命を狙うというならまだしも解るが、家宝を割るは筋違い。割れば必ず罰せらるると知りつつ割って、遺恨の晴れる訳もない――というのである。
菊は奸賊に非ずと言う者も多かった。
慥かに菊の父は盗賊で、先代青山鉄山の手でお縄になってもいるけれど、菊はそのことを知らずに育った堅気であるというのである。蛙の児は蛙と謂うけれど、悪党の子即ち悪党と限るものではないだろう。菊なる者が十七八の娘であるのなら、捕物があった時分はまだ童――親の旧悪を知らずと育ったとしても、無理からぬ話ではあるだろう。
悪なるは青山播磨――。
そう唱える者も居る。
否、そう言う者は殊の外多いのだ。菊哀れ、菊無念、そう思わねば怪異話に筋が通らぬからであろう。
そう言う者はこう語る。
生来好色の青山播磨、市井で密やかに暮らす菊の美貌をば見初め、囲い女にせんと強く欲したのだという。
だが、菊には既に想い人、言い交わした相手が居り、播磨の懸想は叶わなかった。しかし播磨は諦めず、菊を我がものにせんと奸智を巡らせ、父親の旧悪を知るやその暴露を理由に嚇し付け入り、挙げ句無理矢理水仕奉公に召し上げたのである――と。

哀れ生木を裂かるるが如く許婚と引き離された菊は、それでも播磨の執拗な要求を拒み続けた。やがて業を煮やした播磨が菊の許婚を亡き者とするに至り、愈々世を果無んだ菊はわざと家宝の皿を砕き自ら播磨の怒りを買い、進んで手討ちになったというのである。

慥かにそれなら祟りもあろう。

だが、それならばただ怨む筈、皿など数える意味がないと、こう言う者も居るのであった。

されば。

こう唱える者も居る。

菊と播磨は互いに惚れ合っていたのであると。

そうであっても、方や旗本、方や女中、どうであれ身分違いの間柄。所詮は添えぬ仲。そうと知りつつ二人は二世を誓い、誓ったまでは良いものの――。

播磨に良家の子女との縁談が持ち上がったのだというのである。

一説に、変心した播磨が菊を捨て、それでも想い捨て切れず、未練執着甚だしき菊めのことが邪魔になり、家宝を損ねたと因縁を付けて始末したのだ――という。

捨てられた上に罠に嵌められ殺されたのであれば、皿も数えようというものであろう。

また一説に、未練執着を断てなかったのは播磨の方であるともいう。自が身分を弁えていた菊は、偏に播磨の出世栄達を願い、自ら身を引いたのだが、播磨の方は諦め切れず、その武士らしからぬ態度に見切りをつけさせるため、菊はわざと皿を割り井戸に身を投げた――というのである。

しかし。
そうならそうで、今度は祟る謂れもなくなってしまう。慥かに菊は哀れだが、播磨を好いて死んだなら、祟る所以は何もない。
これは、所謂心中なのだと言う者も居た。
慥かに二人は好き合っていた。しかし播磨に嫁を迎え青山家の栄達を願う親類が、二人の仲を裂くために、菊を陥れたというのである。
どうであれ、家宝を割れば手討ちが決まり。そうなれば、菊を討つのは播磨が役目。
そは濡れ衣と知りつつも、所詮現世では結ばれぬ、身分違いの縁ならば、いっそ来世で添い遂げようと、青山播磨は菊を斬り、追って死んだという筋書きである。
その場合、菊は播磨ではなく、自らを陥れた親類に祟っていることになる。そうならば、人寄り付かぬ荒れ屋敷で皿を数えて何になる。
死して後、一枚二枚と数えるならば、騙した者に聞かすが道理。
どうであれ——。
巷間で語られる番町の怪談は、いずれもどこかに齟齬があるのだ。
そしてその齟齬は、永遠に埋まらぬのである。
何故ならば。
その怪談に関わる者は——。
どうやら一人残らず絶えてしまったからである。

慥かに惨事はあったのだ。
その惨事こそがこの怪しき巷説を生む契機となったことは、言うまでもない。
菊なる女中は事実青山家に奉公しており、その者は実際に屋敷の中で死んだらしい。亡骸を引き取りに来るように長屋に報せが来たという。だが――報せを受けて青山家に出向いたその母静も、また静に同行した菊の幼馴染みである米搗き三平なる者も、長屋には戻らなかった。
二人とも消えてしまったのだ。
そして。
菊の訃報から数日を経ずして、青山播磨は無頼の町人数十名を相手に喧嘩斬り合いの上、死んだ。
当主惨死の報を受け、青山家に赴いた役人は、息を呑んだそうである。
側用人、若党、小姓を始め、家臣奉公人の多くが――死んでいたのである。
番町は俄に騒ぎとなった。
生き残っていた者どもの証言は甚だ曖昧なものでしかなかったのだが、見聞の結果、家人を殺害したのは播磨の朋輩である遠山主膳という侍であり、この主膳は、どうやら播磨によって成敗されたものと思われた。
主膳もまた。
青山家屋敷内で事切れていたからである。
更に。

青山の家に客として逗留していた大番頭大久保唯輔が娘吉羅、及びその侍女二名も、矢張り斬られて死んでいたという。婦達を斬ったのが誰なのか、それは知れぬことだった。

生き残った数名は、播磨と主膳が斬り結ぶ処は見ていたらしいが、何方が何方なのか、まるで解らなかったそうである。修羅場を避けて身を隠していた数名は、播磨惨死の報せを受けるまで兇ろしくて身が竦み、外に出るは疎か動くことすら出来なかったのであった。

夜半に何かが起きて、菊が死んだ。直ぐに小姓が報せに走り、菊の母と米搗き男が屋敷を訪れた――そこまでは確かなようだった。

その後。

一体何があったのか。

誰にも判らなかった。

隣家の者でさえ青山家の変事には気付かなかったようである。

何かの理由で先ず菊が死に、その結果青山家に何かが起きて、家人の殆どが死んだということだけは確実だった。播磨は生き残り、何も処置をせずに家を出て、そして間もなく死んだのである。

判っていることはそれだけで、その僅かな事実さえもやがて封印されてしまった。

大番頭が隠蔽したのだとも、青山家縁の者が有耶無耶にしたのだとも謂われたが、それは知れぬことである。

巷には、忌まわしき流言だけが残り、それはやがて怪談となった。

菊の亡魂は夜な夜な涌き出でて、
一枚二枚と皿を数える。
三枚四枚五枚。
六枚七枚八枚九枚。
皿は必ず――欠けている。
足りぬから。欠けているから。永遠に満たされぬから。だから数え続ける。数えても数えても数え切らぬ――。
無間地獄。
その番町の怪談は、もう何もかも嘘なのだと言う者も多かった。何故ならそれは、元は播州辺りの話であると謂うのである。いやいやそうではない別の国に残る稗史だ、他の在所の昔噺だ、別の土地の世間話だ誰それの創り話だと、そう言う者も多かった。
それもその筈、同じような物語、同じような筋書き、まるで同じ怪談は、古今に東西に、山と残っているのであった。
こうして。
菊と播磨はおはなしになった。

昔数え

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。